

柱島の歴史

岩国市教育委員会

金蔵山山頂から見た島々

刊行にあたって

柱島群島は岩国市中心部より南東の沖にある有人島3島、無人島9島の計12島で構成される島々です。瀬戸内海中にあるこれらの島々は岩国地域のほか愛媛や広島など様々な地域と交流しながら島の歴史や文化を育んできました。ただ、島という地勢的な状況により、記録として残らないところが多く、明らかになっている部分は断片的です。

近年、人口減少や高齢化が進んできており、島独自の歴史や暮らし、習慣などの記憶が薄れてきています。本書は島の記録や記憶をとどめておこうと思い作成した冊子です。この冊子が多くの方々の目に触れ、柱島群島の島々のことに思いをめぐらせていただければ幸いです。

目次

I 柱島の位置と環境	1
II 史料にあらわれた柱島	2
III 柱島の中世	4
1 柱氏と忽那氏	4
2 柱島城	8
3 柱島の中世遺物	10
4 桑原氏と中臣氏	12
IV 柱島の近世	14
1 岩国藩政下の柱島	14
2 柱島の幕末	18
3 柱島の塩	20
V 柱島の近現代	22
1 近現代の柱島	22
2 柱島の戦争遺跡	25

I 柱島の位置と環境

柱島は安芸灘あきなだの南西に位置する柱島群島の本島であり、北は倉橋島、江田島、西は岩国市域、南は屋代島やしよしまとその属島、東は中島をはじめとする忽那諸島くつなしよとうに囲まれており、これらの島々の中央部に位置している。

島の地質は主に片麻状花崗閃緑岩へんましよつかこうせんりよくがんで形成されており、南東部分は砂浜などの沖積層、花崗岩質の層が一部に見られるのである。また、島には銅鉞脈があり、大正のころに試掘が行われたそうであるが、場所は不明である。

現在の柱島の人口は157人（平成28年4月1日現在）で農業と漁業の島である。切り干し大根やヒジキ、タイなどは島の特産となっている。柱島へは岩国港からの航路があり、約1時間ほどで行くことができる。

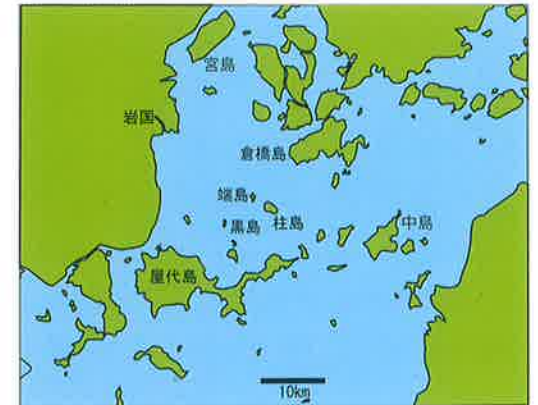


図1 柱島群島とその周辺



(写真1) 柱島港



図2 柱島の位置

Ⅱ 史料にあらわれた柱島

柱島が史料にあらわれる初見は賀茂別雷神社（上賀茂神社）
 文書にある寿永3（1184）年四月二十四日の源頼朝の下文案に
 上賀茂神社領の狼藉（無法な振る舞い。乱暴な行い。）停止を
 命令した文書の中に「周防国、伊保庄、矢嶋（八島）、柱嶋、
 竈戸関（上関）」とあり、柱島がこの時期までには上賀茂神社
 の社領となっていることがわかる。そして、現在、柱島に鎮座
 する賀茂神社は島が上賀茂神社の社領であった名残と言える。

また、『玖珂郡志』には加茂大明神として「勧請治承元（1177）
 年、平判官康頼・丹波少将成経ト申伝、再興年月不詳」という
 伝承を記述しており、史料と伝承からは平安時代までには、柱
 島に人々が居住し始め上賀茂神社の社領に組み込まれていった
 と考えられる。

上賀茂神社へ何を貢納したのかは史料にはあらわれないが、
 他の瀬戸内海の島々と同じように塩や苦（萱を編んだ敷物、ム
 シロ）を上賀茂神社に納めていたと推測される。

また、柱島の島名は多くの神様が祀られている島で神様は
 「柱」と数えるために柱島となったと伝えられている。賀茂神
 社には現在は13の末社（須加社・貴船社・稻荷社・住吉社・春日社・
 大歳社・若宮社・今宮社・新宮社・金毘羅社・妙見社・天神社・
 猿神社）が境内に祀られており、元々はもっと多くの神様が島
 の中で祀られていたとみられる。



(写真2)



(写真3)



(写真4)



(写真5)



(写真6)

賀茂神社の境内。江戸時代までは加茂大明神として現在の位置より南に鎮座していた。拝殿の裏には数座の末社や、小さな神棚を多く安置する建物もあり、多くの神が賀茂神社に祀られている。

Ⅲ 柱島の中世

1 柱氏と忽那氏

柱島の中世についても史料が断片的であり、詳細な島の中世はわかっていない。鎌倉時代から南北朝時代にかけての時期の柱島には柱氏と忽那氏が関わっているようである。

柱氏は後に紹介する忽那氏の文書の中に「柱五郎左衛門尉俊宗」の名がみえる。忽那氏文書の興国 3 (1342) 年の史料には南朝側の貴族である中院定平より、凶徒 (北朝側勢力) 退治で大功を遂げた時には屋代島 (周防大島) にある嶋末莊西方領家職を柱俊宗、忽那義範、嶋末近行、嶋末近重に分け与えると書かれて、柱俊宗は忽那義範らと南朝側に組していたようである。ただ、これ以降の史料には柱氏の活動が見られないため柱氏の事績についてはよく分かっていない。

また、柱氏は伝承では延久 2 (1070) 年に没したと伝えられる藤原穂 (保) 智を祖としている。この人物は文献には見られない人物である。当時の貴族、藤原姓の人物を祖とするのは後述の忽那氏も同様で、藤原親賢という人物を祖としている。

次に忽那氏について記述する。忽那氏は忽那島 (愛媛県の中島) を中心に平安時代から室町時代にかけて活躍した海上勢力であり、その勢力下にあった島々を忽那七島と称していた。忽那七島とは忽那島 (中島)、睦月島、野忽那島、二神島、怒和島、津和地島の愛媛側の六島に柱島が加えられていた。柱島が忽那氏の勢力下におかれるのは、『忽那開発記』に、忽那氏の二代目にあたる藤原親朝が寛治年中 (1087 - 94) に六島を開発し、嘉保の頃 (1095 - 96)、大浦八幡 (宮) を六島に遷し奉ると記してあり、柱

島にも忽那氏の勢力が浸透したことが伺える。柱氏の祖とされる藤原穂智についても藤原姓であり、忽那氏と柱氏、柱島との関係性は密接であったと推測出来るのである。

そして、柱島と忽那氏の関係で史料がよく残っているのが、南北朝時代に活躍した忽那義範である。忽那氏文書には義範の「柱島下野房」とも書かれたものも残されている人物である。

忽那義範は忽那氏の九代目重清の弟にあたり、中島の神浦を根拠地として南朝方に味方し、後醍醐天皇の皇子である懐良親王の九州入りに功をなしており、懐良が太宰府を中心に「征西府」としての勢力を確立して以降も南朝勢力として活躍しており、柱島の地頭職には正平三 (1348) 年、長野郷 (岩国市長野) の三分一の地頭職には正平五 (1350) 年に任じられている。また、柱島の地頭職任命以前の延元四 (1339) 年の懐良からの令旨には「柱嶋下野房」と義範をさす名が書かれており、忽那氏の勢力が柱島にも浸透していたことが分かる。ただ、忽那義範以降の忽那氏文書には柱島に関する記述がないため、義範以降の忽那氏が柱島にどう関係していたかはわからない。柱島の中世は戦国時代までの約 200 年ほどの記録が今の所確認されていない。



(写真7) 金蔵山の中腹にある柱島城跡に立てられている藤原穂智の墓。後世に立てられたものと見られる。

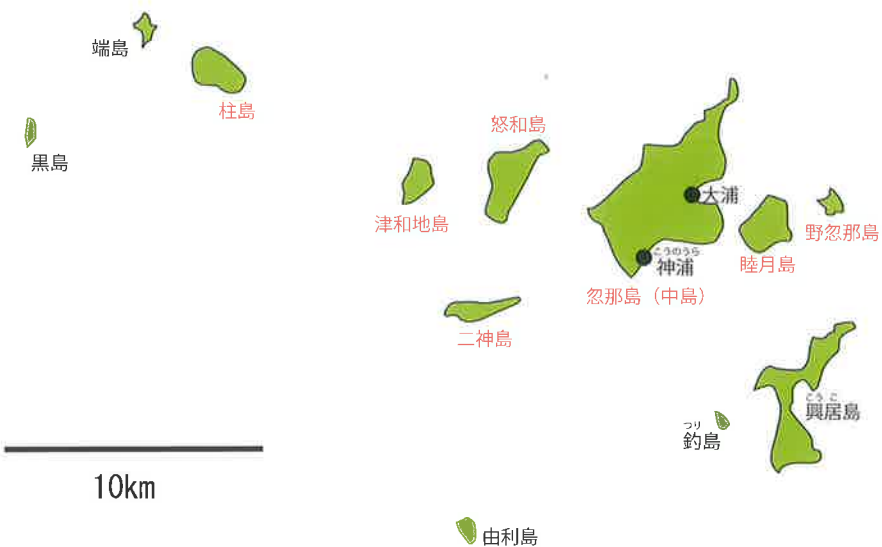


図3 柱島群島と忽那諸島



(写真8) 藤原親賢を祀る廟所



(写真9)
藤原親賢の碑(廟右手)



(写真10) (廟左手)

中島(忽那島)にある忽那氏ゆかりの寺、長隆寺の奥にある。忽那氏の祖といわれる藤原親賢の廟所。拝殿の奥、本殿の両脇には忽那七島の開発等や官位など親賢の事蹟が刻まれている碑がある。



(写真11) 中島(忽那島)の神浦集落(写真の中央)南北朝時代に忽那義範が拠点とした。



(写真12) 瀧神社の傍にある忽那義範公表忠碑。忽那義範は南朝側に味方して活躍したことから、大正時代に贈位を受けて顕彰された。



(写真13) 神浦集落にある瀧神社。牛頭天王を祀る。中島は古代より牛の放牧地であり、都への貢納が行われていた。忽那氏は古代からの開発がすすんだ島を拠点にしたと考えられる。寿永2(1183)にこの地に立てられた。

2 柱島城

柱島にも中世の山城があり、金蔵山の山麓、標高約 150m に柱島城跡が所在している。平成 11 (1999) 年の山口県城郭研究協議会の調査によると連郭式の山城であり、土塁と堀切が確認されている。規模は主郭部分で 23m×10.8mの広さをもつ。山頂側に幅 7.3m、深さ 2.4mの堀切をもち、内側に土塁を有する構造が残っている。

また、『玖珂郡志』や『(享保) 村記』にある伝承には、中臣 (富) 氏や桑原氏に関わる城の存在を伺える記事があり、郷土史家であった松重茂一氏はこれらの記載をもとに、図のように海上要塞のような柱島の城館群を復元している。柱島では発掘調査や詳細な分布調査は行われていないため、現在は柱島城跡だけが確認されているのみである。

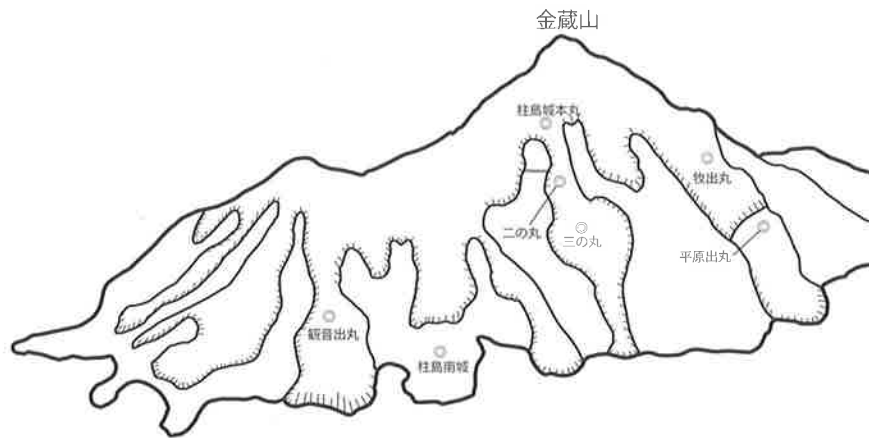


図4 郷土史家松重茂一氏による柱島城郭群の復元
 (『柱島読本』をトレースおよび改変)

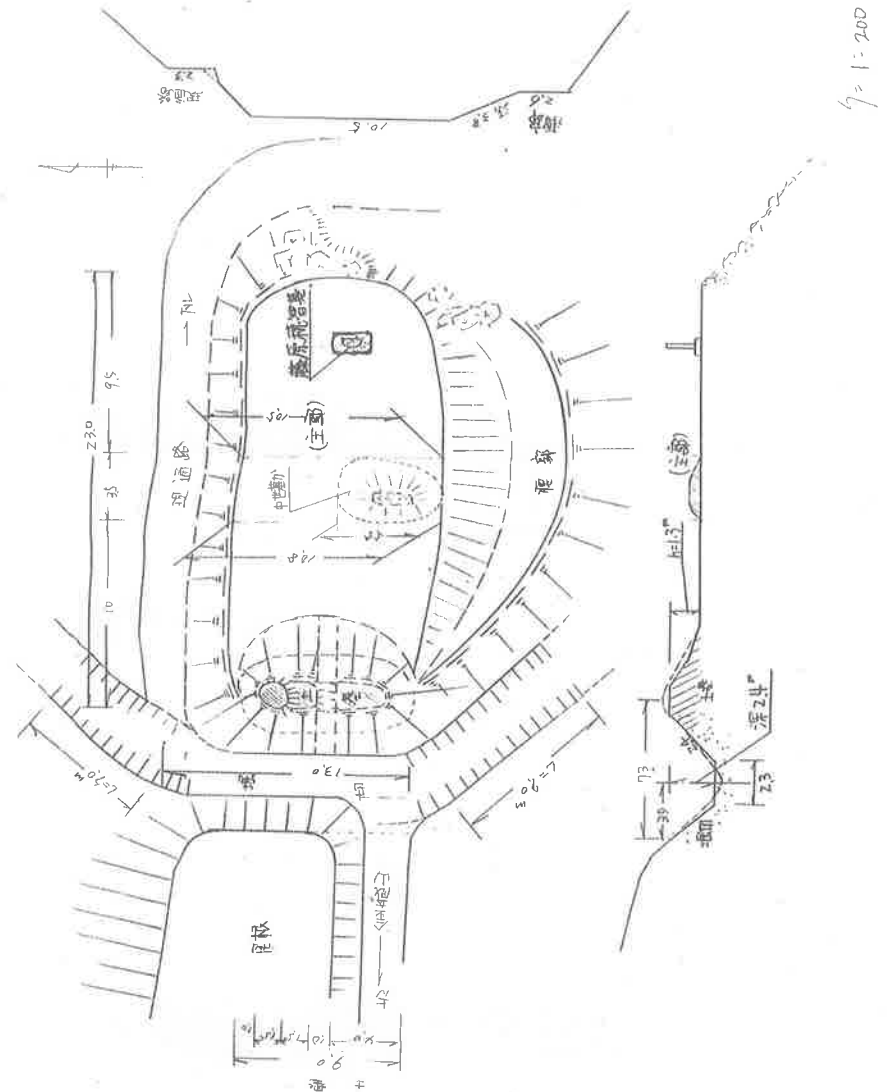


図5 柱島城跡縄張図 (山口県城郭研究協議会作成)

3 柱島の中世遺物

柱島城跡以外に中世の遺跡となっているものは島にはなく、土器や陶磁器などの採取の事例も現在のところ確認されていない。ただ島内には道や畑の傍らに中世の五輪塔や宝篋印塔の一部が集められた場所が7ヶ所確認出来る。

五輪塔や宝篋印塔は平安時代以降、供養塔や墓に利用されており、集められた場所の周辺には島の集落の共同墓地が存在していた可能性が高い。五輪塔の時期は比較的中世のなかでも新しい時期、15世紀から16世紀のものと考えられる。しかし、島の南側、浦庄の浜近くで確認出来た五輪塔の一部は大きさが他のものより大きく、古い様相を見せているように思われる。その他の五輪塔や宝篋印塔については市内でも通津や北河内などで確認出来るものとも近いように思われる。

これら島の五輪塔の存在は継続的に島において集落が維持されていたことが分かり、今後、島内に中世の遺跡が見つかる可能性もあるのではないかと考えられる。

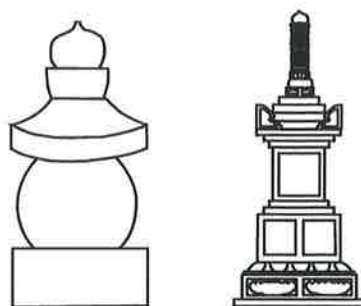


図6 五輪塔(左)と宝篋印塔(右)



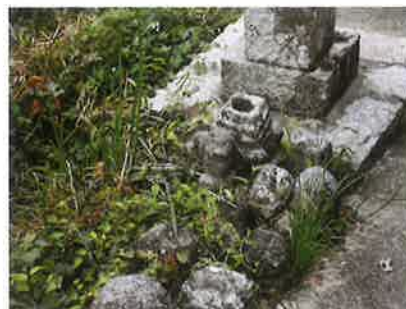
(写真14) 通津の五輪塔群。15～16世紀代か。



(写真15) 吉川広家終焉の地(通津)にあった五輪塔。



(写真16) 松田港近くの地藏堂の横の五輪塔



(写真17) 歓喜寺跡境内の宝篋印塔・五輪塔



(写真18) 柱島港近く、若宮様と置かれている火輪



(写真19) 来見の大師堂近くの五輪塔



(写真20) 浦庄の浜近くの五輪塔



(写真21) 金蔵山登山口の宝篋印塔と五輪塔



(写真22) 柱島港東側の宝篋印塔

4 桑原氏と中臣氏

忽那義範や柱俊宗が登場する南北朝時代以降の中世柱島の歴史は戦国時代までわからない状況が続く、戦国時代の柱島の記述についても、島の文書であった『柱島旧記』（村記では『庄屋旧記』）にわずかに書かれている程度である。この『柱島旧記』には島の勢力として桑原氏と中臣氏が島主を争い、最後は中臣氏が勝利し、近世の庄屋中富家として続いていくことが書かれている。

野島氏（能島村上氏）の次男が屋代島（周防大島）和田の島末八ヶ村と柱島を所領とした後に島に入ってきたのが桑原空之助であった。ここに客分として島に来たのが河野氏の家臣中臣弾右衛門（勘解由）であり、息子の小次郎を野島氏へ奉公に預けていた。その後、弾右衛門は空之助に殺害され、残った子、小次郎は野島氏の力を借りて、桑原空之助を討ち果たし柱島の領主となったのである。小次郎のあと弟である小三郎が中臣の家督を継ぎ毛利（穂田）元清の配下にもなっている。小さな島においても柱島は、村上水軍や防長地域の支配者となった毛利氏の影響を受けながら近世へと、歩んでいるようである。



(写真23) 能島村上氏の居城能島城（写真中央の島 愛媛県今治市）。能島村上氏は中世に瀬戸内海を勢力海域とした海賊衆である村上水軍の三家（能島・来島・因島）の一つである。



(写真24)

島内にある桑原空之助と伝えられる墓（写真上）で脇には妻と子の墓（写真下）が立てられている。桑原空之助の墓には「文化」の年号（1804 - 18）が刻まれており、後世に供養として立てられ、伝えられたものと考えられる。



(写真25)

時代	間接統治者	直接統治者	柱島豪族部将内訳
1000年代より (平安時代)	忽那氏（藤原氏）	柱（島）氏（藤原氏）	柱氏（藤原氏）
1405年まで	忽那七島水軍	柱島地頭	平原氏・山崎氏（平氏）
1405年より	伊予忽那島	柱島城主	諏訪氏（南朝系客将）
1405年より	河野氏	桑原氏	伊予八人衆（河野氏の直臣）
1583年頃まで (天正11年)	伊予国守護 伊予湯築城主	（河野氏の名門部将） 柱島城主・柱島南城主	柱島氏・柱氏・平原氏 山崎氏・諏訪氏
1583年より	能島村上氏	中臣氏	柱島氏・柱氏・山崎氏
1585年まで (天正13年)	伊予能島村上水軍	伊予能島村上氏の家臣 柱島南城城代	諏訪氏 柱島神党（大森氏・木田氏）
1585年より	来島村上氏	中臣氏	桑原氏・島根氏・その他）
1600年まで (慶長5年)	伊予来島村上水軍	能島水軍→来島水軍 柱島南城城代	伊予八人衆の子孫、柱島神党と称す。
1600年より		由宇代官	
1871年まで (明治4年)	吉川氏	庄屋 中富氏	中臣氏→中富と改姓

松重茂一氏による柱島統治者内訳（「柱島の歴史」内の表を改変）

史料と島の言い伝えからまとめたもの。島民達の先祖が各時期に島に入ってくる勢力主や家臣であるようで大変興味深い。

IV 柱島の近世

1 岩国藩政下の柱島

柱島は近世になると岩国藩領となり、由宇組（代官所）の支配下となる。そして、中富家が代々、島の庄屋を世襲していった。

これまで柱島の水軍であった家は藩の舸子組（水夫）として45軒の家が組み込まれた。

島の石高は当初は80石、寛永12(1635)年には51石9斗2合、元禄11(1698)年には58石2斗7升8合、享保9(1724)年には55石9斗1升2合に改められている。また、塩と苦(ムシロ)の生産も行われており、これらについても藩に納められていた。

寺社については、元々島には歓喜寺（曹洞宗 現在は廃寺）のみであったが、吉川広家が柳井の誓光寺の末寺として善立寺（浄土真宗本願寺派）を、庄屋の中富氏が西栄寺（真宗大谷派）を建てて島には三つの寺が近世には存在し、来見には観音堂もつくられていた。神社は加茂大明神（現在の賀茂神社）が『玖珂郡志』等に史料に見られる。絵図には妙見社と天神社も見られ、妙見社は現在の北迫八幡宮、天神社は現在の賀茂神社の位置に存在していた。加茂大明神は現在の賀茂神社の位置ではなく、州鼻の東側、貴船の峰の麓付近に所在していた。中世の時期もこの位置ではないかと推測される。

※藩としては慶応4(1968)年の成立であるがここでは便宜上、岩国藩として記述する。



(写真26) 島の南東側に神社が集まっている。元々はこの辺りが島の集落であったのかもしれない。



(写真27) 庄屋中富次郎左衛門（浄休）の墓
宝永2(1705)年没



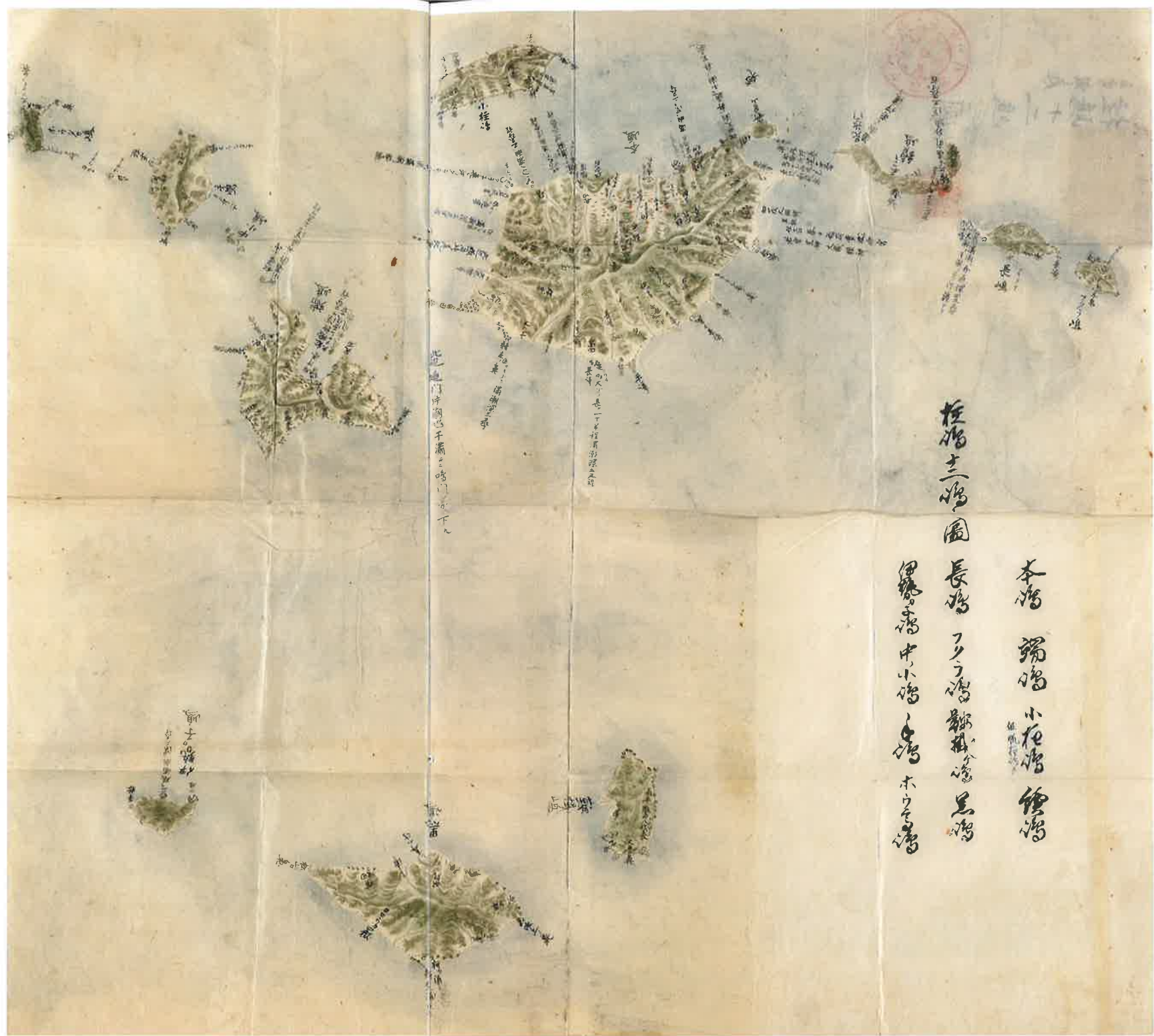
(写真28) 以前は庄屋屋敷（中富家）であった場所。現在は旅館になっている。



(写真29) 近世柱島の集落部分。現在の集落範囲とあまり変わらない。
(岩国徴古館 蔵)

(写真 30) 柱島十二嶋図
(岩国徴古館蔵)

岩国藩に納められた村絵図の一つである。
柱島をはじめ柱島群島の十二の島がすべて描かれている。
享保の『村記』の際に描かれたもののため、柱島と端島のみ人が住んでおり、黒島がまだ無人島となっている。



2 柱島の幕末

柱島の幕末については二人の人物が島に関わっている。一人は東沢瀉^{ひがたくしや}(1832-91)、もう一人は島出身の赤禰武人^{あかねたけと}(1838-66)である。

東沢瀉は陽明学者であり、藩校養老館の助教になったが1年で辞任した。藩の佐幕的傾向に飽き足らず、南部五竹^{なんぶごちく}や来栖天山^{くるすてんざん}らと必死組を組織して兵制改革にあたり、藩内にも彰義隊等の諸隊が編成されることとなった。しかし、彰義隊の粗暴を抑えられなくなり、慶応2(1866)年には柱島へと流罪となった。明治2(1869)年に罪を赦され岩国に戻るまで庄屋屋敷で島民への教育にも励んだといわれている。

赤禰武人は、医者松崎家の元で生誕し、島の庄屋中富家の養子^{けっしやう}となった。その後、遠崎妙円寺の僧月性の下で学び、その月性の紹介で阿月の克己堂でも学ぶこととなった。安政4(1857)年には阿月の領主浦氏の家臣赤禰忠左衛門の養子となり武士の身分を得て梅田雲浜^{うめだうんびん}の下でも学んだ。高杉晋作や伊藤俊輔(博文)らとともに尊王攘夷運動を推進し、英国公使館焼き討ちや下関戦争に参加し、文久3(1863)年には奇兵隊の総督に就任する。その後、高杉らとの立場の違いから対立することになり、出奔し、幕臣永井尚志らと交渉しながら独自の融和策を進めていくことが主戦に傾いた長州藩内では裏切りと見え、柱島に潜伏していた所を捕らえられ、弁明の機会もなく慶応2(1866)年山口の鏑石河原^{むにしがわら}で処刑された。柱島にも維新の志士として赤禰武人がいたことは島もまた維新という時代の流れの中にあっただということである。



(写真 31) 赤禰武人生誕地



(写真 32) 西栄寺にある赤禰武人の墓、赤禰の墓は阿月(柳井市)、東行庵(下関市)にもある。

3 柱島の塩

柱島は近世岩国藩の地誌である『玖珂郡志』のなかで島の産物として塩があげられている。古代・中世、上賀茂神社の荘園であった時代も塩の貢納がなされていたと推測される。

近世には絵図で確認すると北迫塩濱、(長濱)塩濱、(北濱)塩濱の島内3ヶ所に塩浜の記述があり、『玖珂郡志』には北浜、長浜、荒浜、中浜、西浜と5ヶ所の塩浜があり63枚の塩田から18石1斗5升6合の塩を生産していたとある。そして、『玖珂郡志』には塩づくりの様子が記述されているのでその概略を紹介する。

- ① 柱島での塩づくりは揚浜式で行われている。
- ② 塩田をつくる時に赤土を叩きつけて塀を塗るようにつくる。海水を汲んで塩田内にまき、乾いてきたらまた海水を汲んで撒くことを続けて、塩土をつくっていく。
- ③ 塩土を舟(容器)に入れてさらに海水を注いで鹹水(塩分濃度がより濃い塩水)を得て、これを塩壺に貯めていく。
- ④ 塩壺から鹹水を釜に入れ五日間、焚くことで塩の結晶を得て塩を生産する。

現在の柱島では塩の生産が行われていないが一部に揚げ浜塩田跡が残っており、その名残を知ることが出来る。



(写真33) 柱島の地図。集落の外側に「塩濱」の記載が見える。



(写真34)



(写真35)

塩浜跡。揚げ浜式塩田の名残りが残っている。砂浜にそって土手が築かれ、畑の区画には短冊状の小区画もかつて塩田の形状をとどめている。



(写真36)

V 柱島の近現代

1 近現代の柱島

近代をむかえると藩政時代由宇組（代官所）の支配下であった柱島は旧庄屋の中富家が戸長となり、明治初期の島の行政にあたっている。明治 17（1884）年には今津、室木、装束の三ヶ村と一緒に管理され、後には麻里布村として成立する。このあと大正 15（1926）年には麻里布町、昭和 15（1940）年には岩国市に属して現在に至っている。

教育では、明治 6（1873）年に善立寺の境内に学校が建てられ、明治 15（1882）年には玖珂郡第二小学区公立鞠浦小学校分校として成立する。その後学制の変遷を経て、昭和 22（1947）年には岩国市立柱島小学校、昭和 24（1949）年には柱島中学校が成立、昭和 62（1987）年には児童、学生数の減少により小中併設校となり、現在は小学校、中学校とも休校になっている。

医療では昭和 10（1935）年に診療所が建てられ、常駐の医師がいた時代もあった。現在は毎週木曜日を診療日として診察にあたり、緊急の際には救急艇「みしま」による搬送も行われている。

交通については船が交通手段となっている。昭和初期には大島から呉、宇品への航路の中に柱島が含まれており、岩国からの定期航路はまだ成立していなかった。昭和 12（1937）年に漁協が渡船組合を設立し、岩国から柱島、端島、黒島への航路が開始される。戦後は市営、防予汽船と経営が移り、昭和 51（1976）年には防予汽船の岩国一柱島が廃止となるため、岩国柱島海運株式会社とその受け皿となって現在に至っている。

農林水産業について、農業と漁業が島の産業の中心になって

おり、農業では昭和 40 年代までは米、麦、芋類、豆類、野菜類、柑橘類が栽培されていた。米・麦は現在では栽培は行われていない。芋類については昭和 36（1961）年頃までには^{でんぷん}澱粉加工用のサツマイモが盛んに栽培されていたが出荷先の中島（松山市）の澱粉工場の倒産により振るわなくなったようである。柑橘類は主にみかんの栽培であり、サツマイモの代わりに栽培されたようである。現在は人口の減少と高齢化で自給的な栽培が多くなってきているが切り干し大根のように島で獲れた大根を加工して特産品する取り組みが続けられている。

漁業は端島、黒島よりは盛んではなかったが以前は多く島民が漁に何らかの形で関わっていた。昭和 33（1958）年頃まではイワシ漁が端島、黒島と同じく盛んであり、基本的には近海での漁が主である。昭和の初め頃は獲れた魚は、「ショウヌシ」と呼ばれる仲買人との取引であったが漁協が一括して出荷するか個人で出荷するかに変わってきて、現在は漁協が一括で出荷することが主となっている。また、ヒジキといった特産品の加工、販売にも取り組んでいる。



(写真 37) 高速艇「すいせい」岩国一柱島を繋ぐ定期航路



(写真 38) ヒジキ干しの様子。柱島のヒジキは周辺地域と異なりヒジキの若芽を採るため、口入れ（収穫）の時期が異なっている。



(写真 39) 宮本常一が撮影した定期航路の船
(昭和 36 (1961) 年撮影)
(周防大島文化交流センター蔵)



(写真 40) 宮本常一が撮影した柱島の田畠
(昭和 36 (1961) 年撮影)
(周防大島文化交流センター蔵)



(写真 41) 昭和 45 年頃に撮影されたミカン山の様子。サツマイモ栽培が衰退する昭和 30 年代後半から盛んに栽培された (柱島自治会蔵)



(写真 42) 昭和 45 年頃に撮影された畑のビニールハウス (柱島自治会蔵)



(写真 43) 昭和 45 年頃に撮影された出荷のための計測の様子 (柱島自治会蔵)



(写真 44) 昭和 45 年頃に撮影された網漁の様子 (柱島自治会蔵)

2 柱島の戦争遺跡

柱島にも太平洋戦争以前の軍関係の施設の跡が残っている。金蔵山の山頂付近に屋根などの上部構造は残っていないがコンクリートづくりの建物跡が存在する。海軍の見張所の跡で、建物内部には備品等の遺物などは現在残っていない。設置の目的については、柱島の沖、屋代島（周防大島）や情島に囲まれた軍艦の停泊地になった柱島泊地を見張るものであったようである。柱島泊地には当時、陸奥・長門・扶桑・山城・日向・伊勢と多くの戦艦が停泊していた。軍と島民の交流もあったようで、連合艦隊総司令官であった山本五十六も柱島に上陸している。柱島泊地では昭和 18 (1943) 年、戦艦陸奥の爆沈という事故が起こっており、この事故での犠牲者を柱島島民も有志で慰霊している。



(写真 45)



(写真 46)

柱島の南東部、洲鼻にある戦艦「陸奥」の慰霊碑 (左) と柱島泊地 (右上)



(写真 47)



(写真 48)



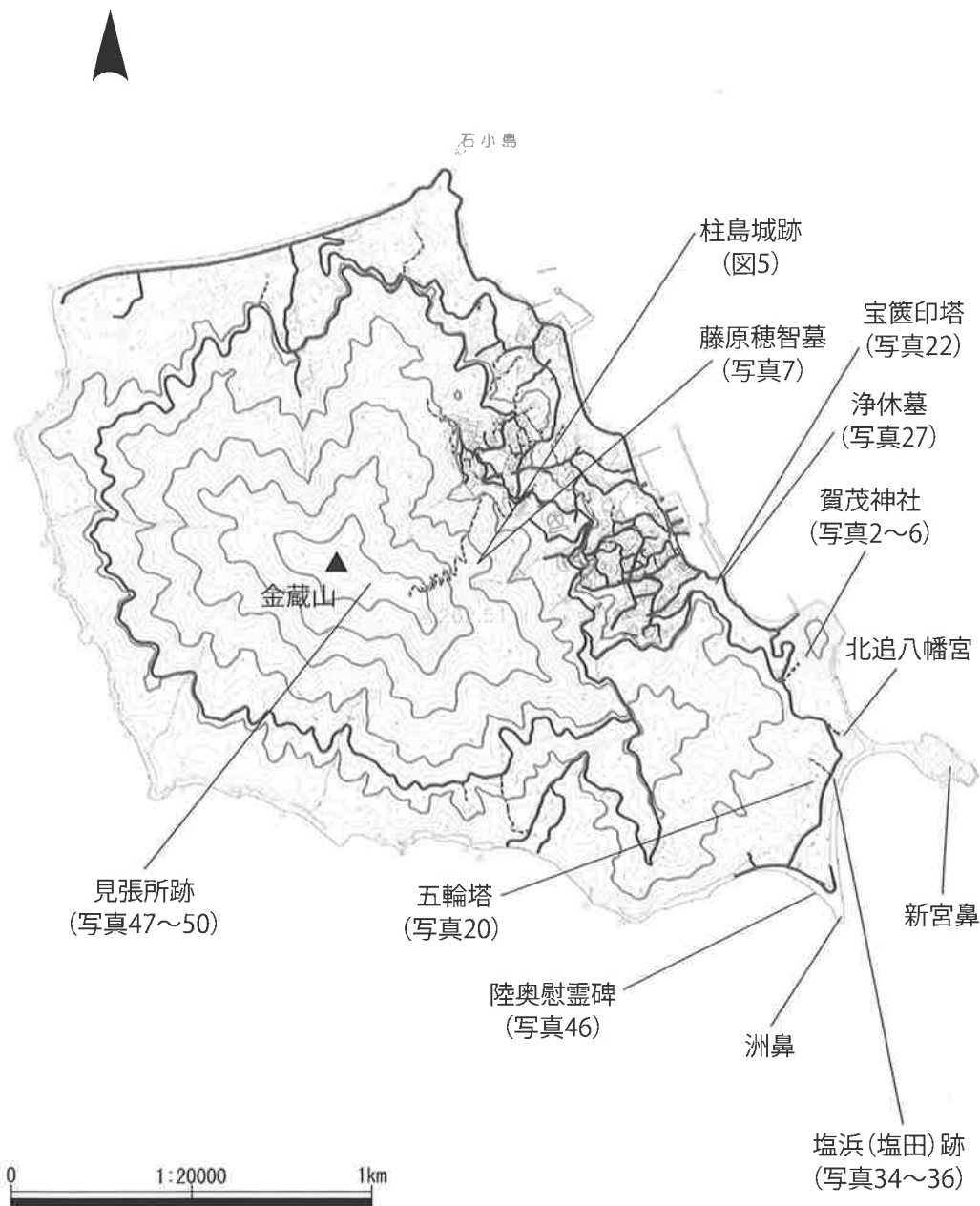
(写真 49)

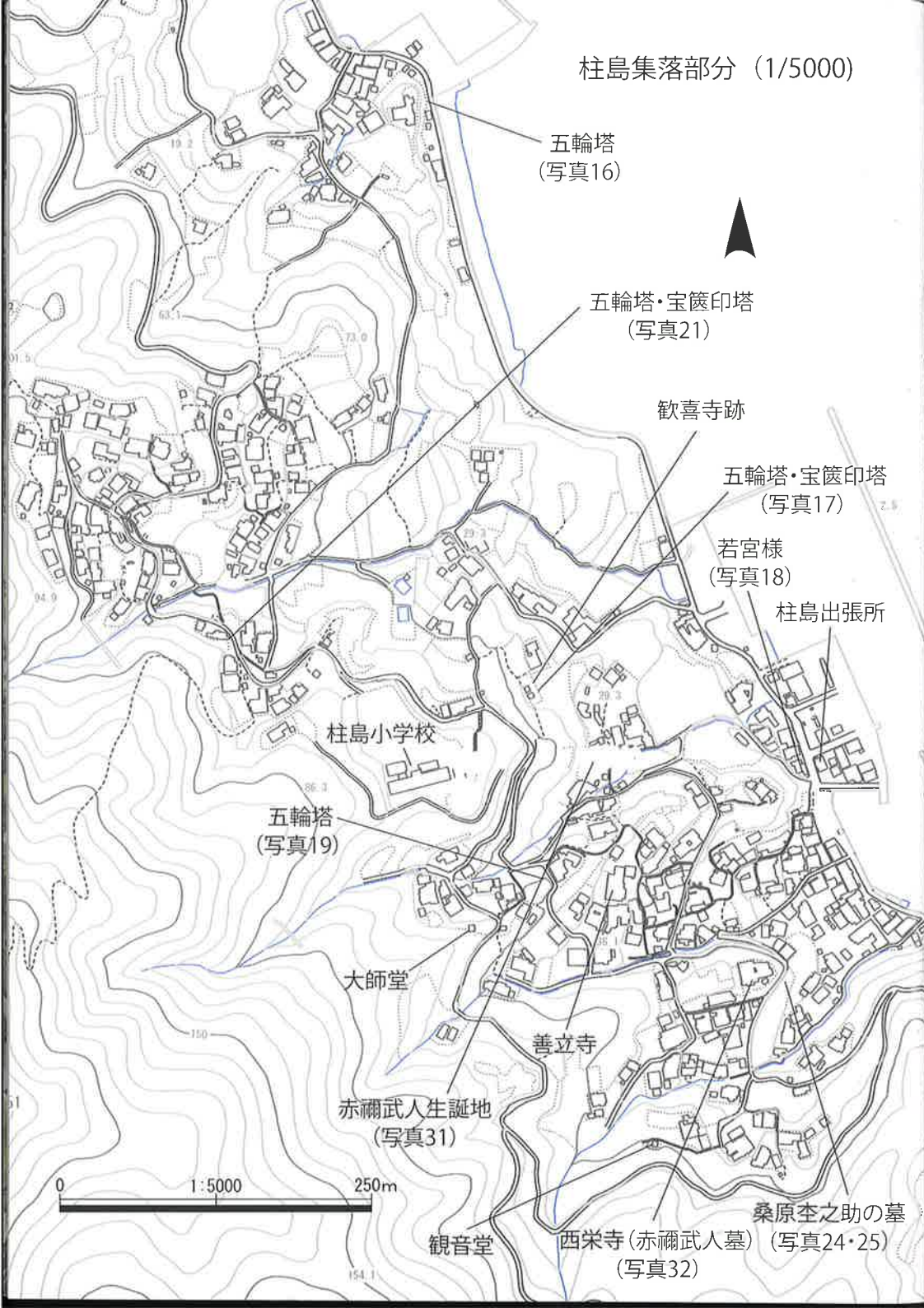
金蔵山山頂の海軍の見張所跡



(写真 50)

柱島 (1/20000)





参考文献

- 岩国市史編纂委員会『岩国市史 上』(岩国市役所 1970)
 岩国市史編纂委員会『岩国市史 下』(岩国市役所 1971)
 岩国市史編さん委員会『岩国市史 史料編三・二 近代 現代』(岩国市役所 2004)
 岩国市史編さん委員会『岩国市史 通史編二 近世』(岩国市役所 2014)
 岩国市立柱島小中学校ふるさと教育研究会『柱島読本』(岩国市立柱島小中学校 1989)
 中島町誌編集委員会編『中島町誌』(中島町 1968)
 中島町誌編集委員会編『中島町誌史料集』(中島町 1975)
 奈良本辰也 三坂圭治編『山口県の地名』(平凡社 1980)
 濱川 浩『伊予国の島嶼土豪忽那氏と海賊衆の形成』『法政史学』37 (1985)
 広瀬喜運 桂芳樹校訂『玖珂郡志』(マツノ書店 1975)
 藤田慎一「宮本常一写真を読む その8 柱島群島(山口県岩国市)後篇」
 『しま』249 (日本離島センター 2017)
 松岡智訓『第三代奇兵隊総督 赤禰武人』(岩国徴古館 2016)
 松重茂一『柱島の歴史』(私家本 刊行年不明)
 松重茂一『柱島海賊水軍跡想』(私家本 刊行年不明)
 宮田伊津美編『享保増補 村記』(岩国徴古館 1989)
 宮本常一『瀬戸内海の研究』(未来社 1965)
 宮本常一『私の日本地図 4 瀬戸内海Ⅰ 広島湾付近』(未来社 1970 2014再版)
 村上吉正ほか編『柱島・走島』(関西学院大学地理学研究会 1969)

- 1 本書は岩国市地域づくり支援事業のうち地域資源活性化事業で作成した冊子『柱島群島ライブラリー1 柱島の歴史』である。
- 2 本書の作成にあたっては柱島の住民の方々をはじめ、以下の方々からのご教示、ご協力を得た、記して感謝したい。(敬称略 五十音順)
 高木泰伸 竹島大祐

柱島群島ライブラリー 1

柱島の歴史

平成 29 年 3 月 31 日発行

執筆・編集 藤田慎一(文化財保護課)

発行 山口県岩国市横山二丁目7-19

岩国市教育委員会文化財保護課

印刷 大村印刷株式会社